

今週のメニュー

■トピックス

◇2012年子どもとためす環境まつり

—今年も地域の催しが中央区立日本橋小学校で開催され、4年連続参加—

■随想

◇ブルキナファソ旅行記(2) —健康—

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

■編集後記

■トピックス

◇2012年子どもとためす環境まつり

—今年も地域の催しが中央区立日本橋小学校で開催され、4年連続参加—

10月20日に、中央区環境保全ネットワーク主催、中央区共催、環境省関東地方環境事務所、東京都環境局、東京商工会議所中央支部、中央区社会福祉協議会後援、34企業・団体協賛、中央区立の小学校8校の参加で「子どもとためす環境まつり」が、中央区立日本橋小学校で開催されました。塩ビ工業・環境協会(VEC)は、昨年の京橋築地小学校に続き4年連続で参加・出展しました。

「子どもとためす環境まつり」は、同ネットワークが「地域の子どものための環境マインドをみんなで育てよう」と区内の小学校を会場に巡回して開催され、今年で9回目になります。すっかり地元の市民活動として定着し、地域の子どものための環境作りが行われています。主催者側の挨拶に続き、東京海洋大学の学生の指導で、サーモンプロジェクトの子どもたちによる手旗信号「ありがとう！」が開会の合図となり、環境まつりが始まりました。

当協会は今年も体育館のステージ近くで、「王子ホールディングス(株)」と「はじめの一歩の会」の間で、子どもたちの興味を引く塩ビ製の大きな地球儀(透明なシートに世界地図が印刷されたもの)や食品サンプルなどに加えて、リサイクル製品や塩ビ管・継手などを展示しました。また、昨年好評だった「ファンタスティック(ぐるぐる回るプラスチックのシャボン玉)」に代わり、市販の蛍光シートを用いて、塩ビものづくりコンテストの準大賞作品「サクラ」を作り、訪れた親子に手渡して喜ばれました。中には熱心にプラスチックのお話を聞かれる方も居られ、塩ビの特徴に感心しておられました。



手旗信号で開会宣言！

当日は朝から天気にも恵まれ、矢田区長様を始め、多くの地元市民や小学生たちが参加され、各ブースでそれぞれの素材を使った体験学習やスライドでの説明を受け、実りある楽しいひと時を過ごされました。お世話をされた実行委員会の方々の努力で今年も無事に事故もなく、終わることが出来ました。



この環境まつりは、「中央区環境保全ネットワーク」が中心になり、日本橋小学校や中央区役所はじめ関係者の連携も良く、手作り感が更に深まっているもので、地元の子どもたちを温かく育てるこの取り組みに参加し、その一翼を担うことが出来たことにとっても感謝しています。

今後も、この地道な活動をVECとしても応援して行きたいと思っています。また、このような取り組みが各地に広がり、未来の子どもたちを育てる風土作りにつながって欲しいと願っています。



VEC ブース

■ 随想

◇ブルキナファソ旅行記（2）－健康－

一般社団法人 日本化学工業協会 若林 康夫

ブルキナファソの入国ビザを申請するときに驚いたことがあります。申請書類にパスポートと一緒に“イエローカード”のオリジナルも添付し、さらに、申請時には“イエローカード”のコピーも提出となっていたことです。

多くの方は“イエローカードってナニ？”或いは、サッカーなどで審判が渡す“警告カード”？と思われたかもしれません。

ここで言う“イエローカード”とは「黄熱予防接種証明書」のことです。世界共通でこの証明書の色が「黄色」なので、一般的に“イエローカード”と呼ばれています。これまでも、入国時に“イエローカード”を見せることが必要な国は沢山行きましたが、ビザ申請時に“イエローカード”のオリジナルとコピーを要求された国は初めてです。以前は多くの国で“イエローカード”の提示を求められていましたが、感染地域が限定されていることから、最近では要求する国は少なくなったようです。

また、日本の検疫所では、黄熱病予防接種は副作用が全くないわけではないため、入国時“イエローカード”の提示が義務付けられている国に渡航する人か、“イエローカード”の提出は必要がないが、流行地域に行く人が強く希望するとき以外は接種をしなくなったようです（以前は、希望をすればほとんどの人に接種をしてくれました）。

ビザ申請でも“イエローカード”についてここまで要求する国ですから、入国の時も、入国審査官のブースとは別に「Health Check」と表示されたブースがあり、“イエローカード”をしっかりとチェックされます。もし、入国時に“イエローカード”を所持していなかった場合（黄熱病予防接種をしていなかった場合）は、入国時、強制的に接種をされるという情報もあります。

妊婦や卵アレルギーがあり（黄熱病予防のワクチンは卵を使って作られます）、どうしても“イエローカード”の取得ができなかった人は、医師の診断書を持参すればいいようでしたが、別室に送られて行きました。

日本では、黄熱病は野口英世の研究で有名です。野口英世は「黄熱病の病原体」を発見したと発表しましたが、残念なことに、後年、原因はウイルスであることが分かり、野口英世の研究成果は取り消されてしまいました。それでも、血清学の研究では超一流であり、いまだにアフリカでも人気のある日本の医学者でもあります。

黄熱病は「人→蚊→人」という感染経路をとり、致命率は5～10%とされていますが、感染してもその症状は様々。あれ？ カゼを引いたかなという軽症の人から、多臓器障害と出血により死ぬ人もいます。

ブルキナファソで出会った国連の WHO（世界保健機関）のドクターに、なぜ、ブルキナファソはこれほどまでに黄熱病の予防にこだわっているのか、また、実際にそれほどまでに感染者が多いのかを聞いてみました。すると、

ブルキナファソ政府は旅行者や海外からの帰国者を黄熱病から守ろうとしているのではない。感染者数は他の地域とほとんど変わりはないが、この国ははっきり言って貧しいため、もしこの国で黄熱病が流行すると、病院にも行けず、薬も買えずに死亡する患者が続出する。そうすると、国としての存続が厳しくなる。

また、黄熱病は「人→蚊→人」で感染をするが、予防接種を受けている人は発症もしないし、媒介することもない。全国民に予防接種ができれば理想だが、費用の関係も、医療機関も充実していないためそうもいかないの、せめて、予防接種代を支払うことができる外国人、あるいは海外からの帰国者がブルキナファソ国内にウイルスを持ち込む、或いは媒介者になることだけは避けたいのだ。という回答が返ってきました。

WHO がアドバイスをしたのかもしれませんが、なかなか奥が深いなあと感心しました。

統計をとった年が異なりますが、ブルキナファソの病院の入院受入れ可能数（ベッドの数）は、

ブルキナファソ： 0.90 台/1,000 人（2006 年）

日本： 13.75 台/1,000 人（2008 年）

と日本とは大きく異なります。

また、医療水準も低く、特に、公立病院の低さに関してはブルキナファソの人でも「死にたければ公立病院へ、死にたくなければ私立病院へ」と言わせるほどです。

救急車も警察や消防署では所有しておらず、病院が所有しています。このため、どうしても必要な場合は、救急車を所有している病院に直接電話をして手配します。救急車は維持費がかかるため、所有しているのはほとんどが私立病院です。公立病院でも救急車を所有している病院はありますが、予算不足のため故障が直せないなどの理由で満足に走行できる救急車はほとんど（全く？）ありません。

日本は救急車を見ない日がないという位、頻りに走っていますが、ブルキナファソでは救急車を見ることがあまりありません。このため、救急車がサイレンを鳴らして走っているのを見ると、子どもたちは大喜び。サイレンを鳴らし、車やバイクの間をグングン走っているのは、ものすごく格好いいのかもしれない。

そう言えば、パトカーとか白バイ、ブルキナファソに来てから1台も見かけていないけど、あるのかな？

薬局の数も首都のワガドゥグーですらかなり少なく、ほとんど見かけません。また、薬の価格も一般的なブルキナファソの人にとっては非常に高価です。このため、簡単に入手できる薬草で作る自家薬や呪術による治療が一般的に行われています。

効き目のほどは。。。

(つづく)

⇒ [バックナンバー](#)

■ 編集後記

先週、米国でオバマ大統領が長い選挙戦を経て再選されました。中国では先週から今後10年間の指導層を決める共産党大会が行われ、メンバーが決まりました。両国の体制の差を強く感じさせてくれた一週間でした。

今週はじめに「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム」を東京大学で開催し、多くの方にご参加いただきました。(次号に報告を掲載いたします。)ありがとうございました。残念ながら東大の銀杏並木の黄葉はまだ青葉、見頃はもう少し先のようです。(可)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp